

## 外国籍の子どもの不就学に関わる宗教の問題 —あるムスリムの少女の不就学の要因と学びへの意識について—

栗田晶 (桜美林大学)

### 1. はじめに

外国籍の子どもの不就学問題は、様々な調査が行われる中でその深刻さが浮き彫りとなっている(小島 2016, 文科省 2022)。具体的な理由については、これまで家庭の経済状況や日本語の問題、帰国等があることが指摘されてきたが(文科省 2006)、詳細な調査研究は少ないのが現状である。本研究では、筆者が約2年間支援しているムスリム少女の例を基に、外国籍の子どもの不就学の要因、学びへの意識が宗教とどのように関係しているのかを明らかにする。

### 2. 調査対象者と分析方法

調査対象者は、スリランカ出身の17歳の少女Sである。宗教上の特定の解釈に基づく理由から学校に通っていない。調査では、まずSへの半構造化インタビューを行った。宗教上の理由により録音が禁止されているため、フィールドノートに記録した。本発表ではこのフィールドノート及び日々の支援記録、関係者の談話から得られたデータを質的に分析し、考察した内容を示す。

### 3. 考察

分析の結果、不就学の要因として、ムスリムコミュニティにおける立場、女性の立場が大きく関わることが浮き彫りとなった。また、宗教が自律的な学びへの意識づけに深く関与していることが分かった。以下では、データを基に不就学の要因に関わる点及び宗教と自律学習の関係について説明する。

#### 3.1 ムスリムコミュニティの中のマイノリティ

データ 1:

Sは敬虔な信仰心を持つ両親のもとに生まれ、幼少期からコーラン(イスラーム教の聖典)とアラビア語の勉強を続けてきた。その影響により、厳格に教えを守る証としてブルカ(目を含めて全身を覆う黒い布)の着用を12歳から自らの意思で始めた。

データ 1は、Sが、ブルカを着用する女性であり、ムスリムコミュニティの中でもマイノリティであることを示している。ブルカはフランスをはじめ、いくつかの国では着用が禁止されており、ブルカを着用する女性は、ムスリムの中でも少数派である。現在の日本では、規制はないものの、ブルカを着用する女性は極めて少なく理解も進んでいない。

#### 3.2 ジェンダーと信仰する宗教、学びへのアクセスの関係

データ 2

- (1) 弟も一定の時期から公教育の場には通っていないが、マドラサ(宗教学校)で学んでいる。Sは女子であるため、マドラサに通っていない。
- (2) 父親と弟は、マドラサで出会った日本語支援者とのつながりがあった。筆者らの支援は、父親がその支援者に、娘への日本語支援者を探してほしいと相談したことから始まった。

データ 2は、ムスリム女性が学びへのアクセスがしづらいことを示している。具体的には、Sの環境では、女子であるためにノンフォーマル教育の一つとなるマドラサで学ぶことができず、結果として筆者らの個別支援につながったことが分かる。安達(2016)は、イギリスの事例から移民のムスリム女性が支援につながりにくいことを指摘しているが、Sも同様の状況にある。つまり、移民としてのムスリム女性で、かつデータ 1で示す特定の解釈に基づく宗教的実践

を厳格に行っているため、それを理解し、十分な配慮が可能な学びの場は日本では限定される。

### 3.3 物理的移動と信仰する宗教、学びへのアクセスの関係

#### データ 3

- (1) 来日後、ムスリムのための外国人学校や塾、市役所で提供された日本語支援、そして筆者らの支援の4つの学びの場に参加してきたが、本支援以外は半年以内に終了した。引っ越しの繰り返しで、対面の学びの場は通うことが困難となり、学びが途切れがちだった。
- (2) ブルカを着用するようになり、移動手段が主に父親の運転する車に限られるようになった。父親は、仕事の都合で忙しい時期もあるため((お願いできず移動が))難しい。

データ 3(1)は、繰り返す引っ越しによって学びが途切れてしまうことが示されている。また、データ 3(2)より、ブルカを着用し始めて以降は特に、移動の際に父親の助けが必要となり、父親の予定と合わせなければならないことから移動へのハードルが以前よりも高くなったことが想像できる。つまり、S の場合、信仰生活を守る中での物理的な移動が学びの場へのアクセスへの支障となっていることが分かる。

### 3.4 明確な学びの目標と信仰する宗教の関係

#### データ 4

- (1) S は街中でブルカを身にまとう自身の姿を見て泣く子どもたち、大人であっても彼女を見て恐れる様子を目にした。「ムスリムはパニッシュだ。」と言われた。
- (2) S は「日本人にイスラームのことを知ってもらうために日本語を勉強している」と言っている。家族も S の意思を尊重して教育機会を設けようとしていた。

データ 4 は、S の日本語学習を含む学びの動機づけとなる日本での体験及び S の学びの目標に対する家族の対応を示している。データ 4(1)より、日本ではブルカを着用するムスリム女性が少ないことから、周囲から否定的な反応を受けた経験があることが分かる。その経験から、データ 4(2)にあるように、日本人にイスラームのことを知ってもらいたいというより具体的な学びの目標が生まれた。S は、勉強は目標に近づくための手段であると認識し、学びの継続を強く希望している。データ 2(2)とデータ 4(2)より、家族も彼女の意思を尊重し自身のネットワークの中で学びの機会を探していることも分かった。

## 4. おわりに

以上から、宗教が外国籍の子どもの不就学の問題には、ムスリムコミュニティにおける立場、女性の立場が大きく関わること、さらに、宗教に関連する経験が学びへの意識づけに深く関与していることが明らかになった。全ての子どもたちの教育を受ける権利を保障するためには、今後はノンフォーマル教育も含めた多様な教育の在り方と選択肢を模索していくことが課題と言える。

#### 【引用文献】

安達智史(2016)「イースト・ロンドンの女性ムスリムの教育意識—家族・主体性・信仰—」『白山人類学』白山人類学研究会、pp.34-51

小島祥美(2016)『外国人の就学と不就学—社会で「見えない」子どもたち』大阪大学出版会

文科省(2006)「外国人の子どもの不就学実態調査の結果について」URL:

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/012.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/012.htm) (最終閲覧日: 2023年2月7日)

文科省(2022)「外国人の子供の就学状況等調査結果について」URL:

[https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt\\_kyokoku-000021407\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220324-mxt_kyokoku-000021407_02.pdf) (最終閲覧日: 2023年2月9日)